

ワーヅワースの詩『靈魂不滅の暗示』

——その譯と註解——

豊田 實

幼年時代の追憶より受くる

靈魂不滅の暗示

「幼兒」は「大人」の父、

自然を敬ふところにて

わが生くる日々結ばれよかし。

—

曾ては牧場も森も水の流れも、

大地も、あらゆるありふれし景色も

われに取りては

天上の光に装はれて、

(2)

かゞやき鮮かなる夢とし見えぬ。

さあれ今は昔日のごとくならず、――

何方どこかを向くとも、

夜も晝も、

過ぎし日に見しものをわれ今見るを得ず。

二

虹は出でては消え、

薔薇はゆかしく、

月はよろこびて

雲なき空を隈なく眺め、

水は星照る夜に

美はしく湛へ、

初日の影はかゞやかし。

されど知る、いづこに行くとも

大地より光輝の消え去りしことを。

三

今し小鳥喜ばしき歌をうたひ、

若き小羊の群れ小鼓に

合はせて踊る間も、

われのみには悲しき思ひ訪れぬ。

されど思ひを述べて悲しみは和らぎ、

われは再び強し。

大瀧は崖より喇叭のひびきを立つ、

わが悲しみ春をそこなふはよからず、

われは聞く山彦の群がりひびくを、

風は眠りぬる野邊よりわれを訪れ、

大地舉りて朗らかに、

陸も海も

なべてうれしさに身をゆだね、

五月のころもて

獣みな休み目を樂しむ、――

いまし喜びの子よ、

われをめぐりてなが叫びを聞かしめよ、
樂しき牧童よ。

四

恵まれし被造物らよ、われは聞きぬいまし等が

かたみに呼び交はす聲を、われは見る

大空いまし等の歡喜に和して笑ふを。

わがころいまし等の祝祭に臨み、

わが頭その冠をいたゞき、

いましらの全き幸福をわれ感ず――残りなく。

わが心塞がば災ひなるかな！

大地よそほひをこらす

このよき五月の朝、

子供等は到る所に

花を摘む、

遠くつらなる百千の谷間にて

新しき花を。日は暖かに

幼児は母のかひなに抱かれて躍る、――

聞ゆなり野の聲、嬉しくも聞ゆなり！

――されど木々のなかのひともと一本、

一つの野邊の名残とゞむるものありて、

何れもともに歸らぬむかしを物語り、

足もとの三色すみれも

同じ言葉をくりかへす――

幻のひかりの行くへいづこぞや、

かゞやさし夢、今いづこにありや。

五

吾等の誕生は眠りと忘却に外ならず。
吾等とともに昇る魂、生命の星は

他の處にて沈み、

遙かの方より來たる――

凡てを忘れはてしにあらず、

全き裸のまゝにもあらず、

ひかりの雲棚引かせつゝ吾等は來たる

われらの住家なる神よりぞ。

天は吾等の幼時にわれらを包めど、

やがて牢獄の蔭は閉ざしはじめ

展ひゆく「少年」の上に、

されど彼はその光、その源を望み、

之を見て喜ぶ。

日毎に東より遠ざかり行くさだめもつ

「青年」もなほ自然の祭司にて、

美はしくはえあるまほろし

その行く道にあり。

されど「大人」は覺る、そのまほろし失せて
味氣なき日のひかりの中に消え去るを。

六

大地はみづからの樂しみもてその膝をみたし、
地にふさはしき數々のあこがれをも持てり。

かくて母親のこゝろづかひさへしのばせつゝ、

高きこゝろざしもて

卑ひくき乳母めのとは力を盡し、

その育て子、地に宿る人をして

そが知りし前世のさかえ、

そが出でし帝みかどの宮居みやゐを忘れしめんとす。

七

新生の幸にひたれる幼児を見よ、
小人の大きさの六歳の愛兒を。

見よ、その手のわざのまなかに坐し、
彼は襲ひかゝる母の口づけに煩はされ、
父の眼の慈愛の光を浴びてあり。

見よその足もとなる小さき設計、圖面、
彼が夢みる人の世の一部にして、
覚えし技術もて自ら造りしものを――

婚禮または祝祭、

哀悼または葬儀、

一事心を捕ふれば、

それに自らの歌を和し、

次には言葉の調子をば

商賣、戀、争ひの對話に合はす。

されど時を経ずして

これもうち棄て、

新しき喜びと誇りもて

小さき俳優は他の役の台詞セリフを覚え、

「喜怒哀樂の人生の舞台」を次々に、

現し世の導き入るゝありとある人物もて

充たしつゝ、はては中風の老年に及ぶ、

恰も彼の營みはみな

絶えざる模倣なるが如く。

八

その外面そとの形、見る人の心を誤らせて

魂の大きさを思はしめぬいまし、

なほいまだ天の遺産を失はぬ

勝れし哲人、目しひにまじる見ゆる人、
たえず久遠くゑんの心の訪れを受け、

聞かず語らず、その秘義を讀み取るいまし、

力ある豫言者、恵まれし先見者、

眞理を心にやどす者――

われら死の暗闇に踏み迷ひつゝ、

世にある限り努め求むるその眞理を――

不死不滅、日光のごとくなが上を

掩ひ、奴隸に臨む主人あるじの威のごとく、

斥け得ぬ存在レラとしてなが上に臨むいまし、

小さき子供なれども、なが高き住ひ、天の

與へし自由の力にかゝやくいまし、

いかなればなれかくも勞して年月を

促し、避け得ぬ軛くみをもたらさしむるや、

知らずして汝が幸福に逆らひつゝ。

やがてなが魂、地上の荷を担ひ、
因襲その力もちてなれを壓せん、
霜のごと重く、生命のごとくにも深く。

九

うれしや、吾等の餘燼には

なほ生ける火残り、

心には、うつろふものの

記憶未だ失せず！

過ぎし歲月の思ひ出はわがうちに

たえざる祝福をかもす。しかはあれども

かくいとも祝福さるべき貴きもの、

喜びと自由、幼き日の單純なる信條――

その頃は躍りはねまたは憩へる時も、

巢立ちし小鳥のごと、希望その胸に羽ばたけども――

感謝と讃美のわが歌は

これらのためにはあらで、

寧ろ感覺と外界に對する

かの去り難き疑惑の念、

わが手より物落ちて消えゆく感じ、

え知らぬ諸界のなかにうごめきつゝ

生き行く者のもつ空漠たる不安の感、

また吾等の人間性が、惡をあばかれし罪人のごと

その前にてをのゝきし、高き本能のために歌はれ、

寧ろかの初めのあこがれ、

淡き前世の思ひ出、

それは何にてもあれ、

吾等の生涯をてらす光の源、

吾等の目の主要なる光のために歌はる。

是等のものは吾等を支へ育み、

われらの騒がしき年月を永遠の「沈黙」の
存在のなかの瞬時と思はする力をもつ――

覺めて亡びぬ眞理にして

興ざめしてゝろも狂ほしき努力もまた、

成人期も少年期も、

喜びと相容れぬすべてのものも、

これを全く廢し破壊するを得ず。

それ故に氣象穩かなる季節には、

陸深くわれら居るとも、

吾等の魂はわれらを此の岸に渡したる

不滅の海原を望み、

瞬くひまに彼方に旅し、

子供等のその岸邊に戯るゝを見、

大浪のとはに逆卷く音を聞くことを得。

さらば歌へ、小鳥等よ、歌へ、歌へ、喜びの歌を。

若き小羊をして踊らしめよ、

小鼓の音に合はせて。

吾等は心にていましらの群れに加はらん、

笛吸く者よ、戯るゝ者よ、

いましら、この日心にみつる

五月の喜びを感ずる者よ。

曾て晴れやかにかじやきし光、今

わが目より奪はれたりとも何かあらん、

草に光輝あり、花に榮光ありし

その時を再びかへすよすがなくとも。

吾等嘆かず、むしろ残りし

もののなかに力を見出さん、

曾てありし故、常にあるべき

生まれながらの感應のなかに、
人の苦しみより生まれ出づる
優しき慰めの思ひのなかに、
死の彼方を望む信仰のなかに、
悟りの心をもたらす年月のなかに。

十一

あゝ、いまし等泉よ、牧場よ、小山よ、森よ、
吾等の親しみたゆるものとの兆きざしを示さざれ。
心の奥にわれはなほなが力を感じ、
われはたゞ、一つの喜びを棄てて
なが常住の支配に生きんとするのみ。
波たてて下る小川をわれ愛するは、
そのごと軽やかにわれ跳ねし日にもまざり、
新しく生まれ出づる日の無垢のかじやきは

今も美はしく、

沈みゆく日をめぐりて集まる雲は、
定めなき人の世のさま眺め來りし
まなこには寂びて静けき色を帶ぶ、

かくてこの馳場もはせて賞も得られぬ。

吾等の生くる基なるひとごころあるがため、
その優しさ、喜び、恐れあるがため、

いとゞ卑しき一輪の花もこの身に與ふ
幾度か涙にあまる深き思ひを。

ウィリアム・ワーズワース

(一八〇二、三一八〇六年作)

註 解

本詩の原題は次の如くである。Ode. *Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood.*

この詩は恐らく一八〇二年頃から書き始められて、一時中止され、一八〇六年に一應完成したものであらう。詩人自身はこの詩の作られた年代を一八〇三年から一八〇六年として居るが、實は一八〇二年から着手されたく、そのことはなほ後で説明するつもりである。(作詩の年代に關するワーズワース自身の記述が必ずしも正確でないのは、この場合に限つたことではない。)

是はワーズワースの生涯中、質的に收獲の最も多かつたグラスミア時代(一七九九年の冬から一八〇八年の春まで)の作であり、*The Prelude* 即ち詩人がこの地に移り住む前年に起稿して一八〇五年に一先づ完了した詩心巡禮の歌とも稱すべき長詩を除けば、この「靈魂不滅の暗示」こそ、惠まれたこの時期の最大傑作と言ひ得るものであらう。オックスフォード大學マートン・コリヂのフェローで、曾て同大學の詩學教授であつたギャロッド(H. W. Garrod)はその著 *Wordsworth: Lectures and Essays* (1923) のなかで、この詩に關する評論の題を *The Immortal Ode* と附けて居るが、この *Immortality Ode* は正しく *Immortal Ode* である。

この詩の書き始められた時期に關しては、ワーズワースの妹ドロシーの日記のなかにこれを暗示するものがあり、且その日記はこの頃が作者の詩心横溢の時期であつたことを示して居る。即ち一八〇二年三月二十六日(金曜)の記事は“A beautiful morning. William wrote to Annette, then worked at *The Cuckoo*(sic)”で始まり、“While I was getting into bed, he wrote *The Rainbow*”で終ひて居る。(註。マネット(Annette)はフランスでワーズワースが結婚した婦人である。)さうしてその翌日即ち三月二十七日(土曜)の記事は、次のやう

に書き出されてをる——“A divine morning. At breakfast William wrote part of an ode.” なほ同年六月十七日（木曜）の記入は、“William added a little to the Ode he is writing.”で終つて居る。

われわれは虹の歌や郭公に寄する歌と靈魂不滅暗示のこのオードとの内容的の關連を考へ、且このオードの一八〇二年三月二十七日の“an ode”及び六月十七日の“the Ode”は共に靈魂不滅暗示のこのオードであると解すべきであらうと思ふ。ギャロッドは前記のそのワーズワース論評集のなか（一二二頁）でさう斷言し、他の學者も同様な結論に傾いて居る。さうしてこの詩は四年に亘つて時をり書き續けられ、一八〇七年の詩集に含められて以來、大きな變化は施されなかつた。またフェンウィック註解と稱せられるもの即ちワーズワース自身が自分の種々の詩に關する註釋を Miss Isabella Fenwick に捧げたもののなかに見出される詩人自身の次の言葉は、そのまゝ事實として受け容れらるべきものであらう——“Two years at least passed between the writing of the first four stanzas and the remaining part.”

このオードと合せ考へらるべきなほ一つの傑作としてティンタン・アベの上數哩ちやうどの所でできた詩がある。さうしてこの詩とオードとの間には、詩人の生涯中最も感受性の深かつた三十歳前後の數年があつたのである。

前の詩を書いた時、詩人は既に自然に對する幼少年時代の感じを失つて居る。即ち自然は幼少年時代の彼に取つては

『一種の食慾であり、思想で補はれる

深い魅力、または肉眼から借りぬ

何等の感興を必要としな

感情と愛であつた。』

然し『その時期は過ぎた』のであつた。さうしてオードに來ると、自然に對する感覺的の喜びからは一層遠ざかり、自然はものまゝであるが、

『されど知る、いづこに行くとも』

天地より光輝の消え去りしことを。』

と嘆いて居る。然しまた一方、前の詩からオードに至る數年間の人生の體驗は、前の詩を書いた時よりも深い心境を彼に與へ、自然の光輝消え去りしを

『吾等嘆かず、むしろ残りし』

もののなかに力を見出さん。』

と彼は言つて居る。さうして彼が言ふ残つた力となるものは、『生れながらの感應』、『苦しみより生まれ出づる優しき慰めの思ひ』、『死の彼方を望む信仰』及び『悟りの心をもたらす年月』であつた。かくして彼は、幼少年時代の自然のかがやきは見失つたけれども、それよりも深い靈のかがやきを自然のなかに見るやうになつたのであつた。

ワーズワースは普通「自然詩人」と呼ばれるけれども、彼の自然は人と密接に結びついたものであつて、人間の心によつて半ば創造された新天地であることをわれわれは忘れてはならぬ。それで大人になつた彼に對して周圍の自然の感覺的光輝が消え失せても、幼少年時代に自然から受けた深い感銘は彼の心の底に潜んでゐた。さうして自然を敬ふ心が彼の一生を貫かんことを彼は祈り、その祈りはかなへられたのであつた。

この關係において、ヘーフォード教授(Prof. C. H. Heford)は、自然の光輝いかに拘らずワーズワースが頑強に持ちつづけた二つの信仰を擧げて居る。その一つは、成人は幼年時代の經驗へそれは恐らく全く忘れられまたは

蔽はれてゐるかもしれないが）から支への力を引き出すことができるといふ確信であり、第二は（教授はこれも亦恐らく第一と同じくアブノーマルな考へと言つて居るが、われわれにはこの方は一層わかり易いやうに思はれる）詩は『靜かな心境で回想された情緒』であるといふ主張である。即ち最初の感情の原鏝から、情緒のひらめきが消え失せた後に或貴いものが出て来る。然しその貴いものは、要するに最初から在つたものが、詩の必要條件たる想像の光に照された結果である、といふ見方である。

かうした見地からこのオードも理解さるべきであらう。即ち幼年時代の記憶が、人生の行路を進んで來た成人の心によみがへると、たとひ子供時代の自然に對する感覺は回復できなくとも、幼時の感情にこもつてゐた「無限」「不死」の暗示をもたらずので、人生途上にある成人の意識のなかに、現在の經驗または幼い頃の自然に對する感覺的歡喜以上に意味深く力強い氣分が生まれ出るのである。

このオードの第四節と第五節との間には、少なくとも二年の間隔があつたことは既に述べた。さうしてこの第五節には前世生存の思想が歌はれて居る。人間の靈魂、生命は神のもとから此の世に生まれ出たものであるが、人間が成長するにつれて前世のかがやきはうすれ、牢獄の蔭が閉し始めるといふ、こゝに現はれてゐるワーズワースの考へは、既にヴォーン (Henry Vaughan, 1622-95) の詩 *The Retreat* にも示されて居る。さうして連想はなほ遠くプラトーンまで溯るのである。『對話篇』(英譯 *Dialogues*) の「ソフィドロス」(*Sophidros*, 245-256) その他同篇の所々参照——以下プラトーンからの引照は、青山學院大學英文科出身で目下米國留學中の梓川羔君の調べに據つた。然し幼ない時ほど神に近いといふ考へ方は、ヴォーンやワーズワースのものであつて、プラトーンにあつては、成熟した哲人こそ榮光の幻を一層よく意識するものとされてゐる。然しワーズワースが前世の記憶に言及し、現世を牢獄になぞらへ、靈魂を星と呼んで居ることなどは、プラトーンから來てゐるやうである。即ち「ディマイ

オス』(Timaeus, 41-42) には、創造の主は人間の靈魂を宇宙の原素と同じものから造り、星と同數にして『各の魂を一つの星に割當てた』とある。なほワーズワースの前世記憶の觀念や現世牢獄の比喩は、理論的思索の結果ではないが、プラトーン哲學のイデアに對するあこがれと一味相通するものがないではない。そのほかオードの第九節の "fountain-light", "master-light" に見る表現にも、全然そのまゝではないが、プラトーンの『共和國』(英譯 The Republic, VII, 517 参照) の連想があるやうである。

然し要するに、ワーズワースとプラトーンとの關係は、このイギリスの詩人がプラトーン哲學の信奉者であつたわけではなく、詩人は自ら體驗した幼年時代の鋭い直覺力、これがあるがために物質の世界が幻のやうに見え、路傍の木も、これに觸つてみなければその存在を信じ難かつた記憶と、その後の人生の經驗を通して與へられた深い洞察、この二つが自然に對する敬虔の念によつて結ばれるといふ彼獨特の思想と願望とを表現するに當つて、彼はギリシャの哲人の靈魂先在説と前世記憶の表現形式の一部を自らの詩のなかに織り込んだものであらう。

プラトーンとワーズワースの思想的關係が必ずしも密接なものでないことは、以上述べたところからもほぼ明かであると思ふ。ギャロッドは、このオードを正しく讀むためには、先づプラトーンをわかれの頭から出してしまつたがよい、とまで言つて居る。さうしてその理由の要點は次の如くである。元來プラトーンは純然たる理知的の立場から論を進めた人で、その前世追憶の思想は即ち彼の認識論であり、人間の知識と思考の説明の根底をなすものである。彼によれば、感覺こそ凡ての誤謬の根原であり、イデアの世界のみが眞實である。これに對しワーズワースは、全くの感覺主義者であつて、彼には認識論はなく、たゞ感覺のロマンスがあるのみである。さうしてプラトーンの興味の中心が事物の論理的意義であるのに對し、ワーズワースに取つては、論理的意義は事物に關する無價値の部分に屬する。従つてワーズワースのプラトニズムといふことになると、そのなかには誤つた考へが混入

せざるを得ない結果となるのである。

以上はギャロッドの論旨と思へるものの紹介であつた。前世生存の問題には、キリスト教の教義との關係もある。キリスト教の聖書には、キリストの先在のことは見られるが、人間の存在は此の世から始まるものとされてゐる。實はワーズワース自身、靈魂の前世生存をオードに歌ひ込んだことを、後になつて氣にした様子も見える。然し今紹介したギャロッドの説明でもわかるやうに、ワーズワースの靈魂先在の考へは、哲學とか神學とかいふやうなものではなく、詩人の直觀、感情の原鑛をそのまゝに露呈したものであるから、詩的の見地から鑑賞さるべきものである。なほコールリッチ (S. T. Coleridge) はオードのなかの靈魂先在觀を『意識の幽冥の境地』("the twilight realms of consciousness")、いはゞ潜在意識から來たものと解し、かうした深い經驗の持主のためにこのオードは書かれたものであることを強調して、誤解のないやうに一般讀者に警告して居る。且コールリッチはブラトーン自身の靈魂先在説も文字通りに解すべきではないとまで言つて居る。然しともかくギャロッドも言つてゐるやうに、ワーズワース自身が靈魂の先在を信じてゐたことは認むべきであらう。然しその根據の確實性やかかる信仰の是非は、自ら別の問題である。

第七節冒頭の『新生の幸にひたれる幼兒』はワーズワースの親友コールリッチの男の子ハートレ (Hartley Coleridge) であらう。ギャロッドもさうとしか思へないと言つて居る。ワーズワースは、さきに、このハートレに寄せた *To H. C., Six Years Old* を書いて居る。この詩は普通一八〇二年の作と言はれてゐるが、父のコールリッチはこれを一八〇一年の日附で引用してゐる (*Annals Poetæ*, p. 15 参照)。この年にはハートレは四歳であつた。オードの第七節の第二行にある年齢は初版 (一八〇七年) には "A four years' Darling" とあつたのが、後で現在のやうに "four" が "six" に改められたのである。(ハートレは一八〇三年に六歳に達したはずである。) たとひ

ハートレを念頭に置いて書くとしても、年齢は實際の數を擧げる必要はないわけであるが、四歳が六歳に改められたのは、この節に記された遊戯などから見て、四歳では幼なすぎると思はれたからであらう。それにしても私がこの節を讀むたびごとに感ずるのは、六歳にしても——またハートレはませた子供であつたやうでもあるが——こゝに描かれた幼児のしぐさの内容があまりにも大人じみて、實感が伴はぬことである。

第九節の終りの七行には再び靈魂前世生存の考へが表はれてゐる。ワーズワースのかゝる考へ方については、前に説明した以上に述べる必要はないと思ふが、印象深いこの數行に關しては、印度のタゴールの詩のなかに、これに似た表現が見出されることを記して置かう。此の世の經驗を積んだ大人が不滅の海原を越えて彼岸に旅し、そこに戯るゝ子供等を見るといふのは、ハーフオド教授も述べてゐるやうに (Wordsworth, p. 162 参照)、再び子供に歸る意味ではなく、詩人はその心の底になほ生き残る想像の歡喜の光に照されることによつて、此の世の種々の深い經驗が一層高い道德的水準に引き上げられる心境を、之によつて表現しようとしたものと解すべきであらう。

一八〇七年出版のワーズワース詩集の下巻の最後を飾つたこの偉大なるオード、ギャロッドも *great* といふ形容詞を附し、前に記したやうに 'Immortal Ode' と呼んだこの傑作は、ギャロッドの見解では、この湖畔詩人の創作力が達した絶頂であつて、それ以後における力の著しい衰頹の少なくとも部分的の説明が、このなかに見出されるのである。これに關しては、先づギャロッドのワーズワース評價を一貫する持論から述べなくてはならぬ。ギャロッドによれば、自然がワーズワースに與へた印象を考へる際、われわれは先づ、特に異常な意識に對する自然の印象を取り扱ふのであることを念頭に置かねばならぬ。即ち感覺によつて見えざる世界に投ぜられたひらめきは、普通人には與へられない頻度とかがやかしさを以て、彼に與へられた。さうしてこの異常な經驗の跡こそこのオードの背景をなして居るものである。この詩に歌はれてゐるところによれば、詩人が幼少年期から青年期、成人期

と進むにつれて、幼年時代の目に映じた自然のひらめきは次第にうすれ、と切れがちになつた。これがワーズワースの體驗であつたことについては、彼自身の言葉によつて疑ふ餘地はなく、さうしてかく次第に彼から失はれ行くものは、彼が自らの人生に取つて何よりも大切であると思つてゐただけ、彼の心は穩かでなかつたはずである。尤も彼は、この失せ行くまぼろしの輝きを償つて餘りある賜物と、深さと清澄さにおいて前に劣らぬ經驗とを得た、と自ら信じようと努め、人にもさう思はせようとして居る。さうして此處まで論じて來たギャロッドは、然しオードの詩人自身、果してさうした心境に達し得たであらうか、と反問し、否定的の立場から、このオードを以て、ワーズワースの詩心發展の頂上であると共に衰頹の端緒であると見て居るのである。

私にかかるギャロッドの見方をそのまゝ肯定するものではなく、その理由は後で述べるつもりである。然し詩心の發展を、感覺を通して自然のかがやきを見る線に沿うてのみ辿るとすれば、この詩は、寧ろそれ以前において頂上に達してゐたそのかがやかしさの實感の喪失を嘆いたものと解し得るのである。既に説明したやうに、詩人はこれより數年前のティンタン・アベの上の詩において、自然の色と形そのものが一種の食慾であり、狂喜であつた時期の去つたことを告白し、このオードでは『過ぎし日に見しものをわれら今見るを得ず。』と言ひ、『かがやかし夢今いづこにありや。』と嘆じて居る。さうしてギャロッドはワーズワースの詩句を引用しつゝこれをもちつて、『いづこに行くとも』この詩人の詩より（原文は「大地より」）「光輝の消え去りしことを」われ等知る』と言つて居る。これは過言であるとしても、このオードあたりが、ワーズワースの創作力が發揮されたほぼ頂上であつたことは、他の批評家も認めて居るところである。なほ之に關連して興味ある一つの事は、近年アメリカにおける心理學者の統計的研究の結果として、人の精力の絶頂は——尤も思索力の向上はこの頂上を越えてもなほ長く續くのであるが——職業や専門の如何に拘らず、三十三歳であるといふ結論が出て居ることである。ワーズワースがこのオードを

書き始めたのが三十二、三歳の頃で、脱稿したのが三十六歳であつたのは、現代の心理學者の結論と思ひ合せて注意に價する事柄であると私は思ふ。

然しわれわれはこのオードを以て、ギャロッドが想像したやうに、貴重なるものを失つたワーズワースがその損失を償つて餘りあるものを得たと自ら信じようとする、己を欺いての強がりの發露とは考へ得ないのである。ワーズワースが幼少年期に感じた自然のかがやき、感覺的の歡喜が、成人するに従つて次第に失はれたことについては、詩人自身の言葉そのまゝをわれわれは信ずるものである。且ワーズワースの幼年時代の感受性には、他の多くの詩人と異なるもののおつたことをわれわれは認め、なほその他の點においても、この詩人の天才の異常性は認めるけれども、幼少年期のまぼろしや自然から受ける感覺的歡喜が次第に失はれたことを以て、詩心發展の終止とは私は考へないのである。詩人の心境には四季の變化があり得るのである。らんまんの春、かがやく夏の彼方には、「わび」と「さび」の秋冬が待つてゐるのである。ワーズワースの詩心は、『靜かに悲しい人生の樂の音』に耳を傾けつゝ、幽玄の境地にわけ入つたのであつた。即ちまぼろしと自然の光輝の消失を嘆じたワーズワースは、感覺から出發して感覺を超えた精神美ともいふべきものを自然のなかに見るやうになつたのである。人生の經驗を通して彼が到着した境地は、最後の第十一節に最もよく描かれて居る。殊にその最後の二行――

『いとど卑しき一輪の花もこの身に與ふ』

幾度か涙にあまる深き思ひを。』

に至つては、一種の有り難さをさへ感ぜしめる芭蕉の句

『よく見ればなづな花咲く垣根かな』

を連想させるのである。さうしてわれわれはここに東西詩聖に一致した心境を見出すのである。